

昭和から平成へ、そしてその先へ

宮城教育大学同窓会会長(学長)

村松 隆



宮城教育大学の半世紀の歴史の上に同窓会の歴史が重なり、それは日本の昭和、平成の歴史とも重なります。同窓会会報第一号から三十号の間、日本がいかに変化したか、変わらなかったものは何か、教育界はどう歩んできたのか、そ

して本学は何にこだわって何を大切にしてきたのか……。そうしたことを熟考し、省察し、様々な思いに浸りながら、同窓生の皆様のお顔を次々と思ひ起こします。時には情熱をもって教育論を展開され、時には大学の役割について叱責を受け、また時には鬼籍に入られた本学の元教員の話をしながら涙をこぼされる……。『教育は心だよ!』と言っていたA教授と夢で逢えた』と嬉しそうにお話しされる……。

本学の誇るべき宝である皆様あつての宮城教育大学です。おひとりおひとりのご活躍のベースは、本学の教育スタイル、教育理念に密接にコネクトし、学生時代、本学教職員から大きな影響を受けられた方もいらっしゃるのではない

かと思えます。また、他には無い貴重な邂逅は、実社会に入られてからの一つの指針となり得たのではないかと思えます。今、国立大学は厳しい状況にあり、本学も大胆な改革を要求されており、本学もこれまでの半世紀の実績に自負を持ち、失ってはいけないものもしっかり見極めて、心の深部にまで達する教育を標榜していきたいと考えております。同窓生の皆様のご指導もいただきながら、イノシシのごとく突き進んで参る所存です。引き続き、皆様のあたたかいご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

宮城教育大学同窓会会報第三十号記念号のご発刊、誠に改めてとうございます。

題字
加藤豊仍名誉教授
発行人
宮城教育大学同窓会
仙台市青葉区荒巻字青葉149
会長 村松 隆
平成31年3月26日発行
印刷
株式会社宮城友栄社

vol.30

CONTENTS

・巻頭言「昭和から平成へ、そしてその先へ」	1	加藤 良樹	11	・四コマ漫画「手伝ってあげようか」	18
宮城教育大学同窓会会長(学長) 村松 隆	2	加藤 報告	12	・一家DE同窓生	19
・特集1「祝 同窓会会報誌30号」	2	矢部 綱治	12	鈴木 久幸・宏子・俊平・文平	20
横須賀 薫	2	鈴木 洋	13	・今年度定年退職教員	20
高木 力雄	3	矢口 晃	13	森岡 正臣	20
相澤 秀夫	3	瀬戸千恵子	14	安孫子 啓	20
阿子島茂美	4	・平成31年度(第32回)同窓会総会案内	14	田幡 憲	21
生中 信行	4	・同窓会事業・会計・予算	15	宮前 理	21
野呂 英樹	5	平成29年度庶務・会計報告	15	安江 正治	22
菅原 和朗	5	平成30年度事業計画・予算	15	吉木 修	22
・特集2「30号を振り返る」	6	・7年越しの「卒業おめでとう」	16	・恩師は今	22
データから見る同窓会会報誌	6	佐藤 雅子	16	・同窓生の輪	22
歴代編集長よりメッセージ	10	田中 彩都	17	・サークル今昔	23
竹田 幸正	10	及川 敏江	17	弓道部	23
浅野 郁子	10	・四コマ漫画でつなぐ思い、つながる思い	18	窪田 憲二	24
近藤 ゆき	11	黒田 謙二	18	庄子 真彩	24
				・事務局だより	24
				・訃報	24
				・編集後記	24

特集1

1970年

祝 同窓会会報誌30号

～30号を通して 母校・恩師・仲間とつながる思い～

宮城教育大学同窓会が発足してまもなく（1988年2月）発行された会報誌は、これまでたくさんの恩師、同窓生にお読みいただき、本号で第30号の節目を迎えました。

特集1では、同窓会に関わりの深い恩師、そして読者である同窓生に、30号に至る歴史の中でつながり続けてきた「母校」「恩師」そして「仲間」に対する思いを寄せていただきました。



萩田
会館
Shubo

林竹二と斎藤喜博



宮城教育大学
名誉教授
横須賀 薫

林竹二の名なら卒業生の多くが知っているだろう。

東北大学からの分離直後の一九六九年から二期六年学長を務め、創立期の宮教大を指導した。また、社会的には哲学者として日本の思想の研究に当り、田中正造の研究で知られている。さらに学長在任中から亡くなるまで、小学校、中学校などで「人間について」「開国」のテーマで授業を続けたことも有名である。

斎藤喜博は群馬県の実践家であり、「島小教育」の指導者として特に学校における授業の研究に力を注いだことで知られている。

林が斎藤を本学教授に招聘したことで、この二人が宮教大で相会い、学生と現場教師の指導に注力したことは、学校現場と教員養成

大学の間の距離が、現在からは想像もできない程に懸隔が甚だしかった当時では、社会的な出来事では見えなかった。

一九七〇年代に在学した卒業生の多くには、二人から学んだ体験と思いが濃厚に残っているはずである。

私は昨年度と今年度、東京学芸大学で新入生向けの特別講義を依頼され、「斎藤喜博がいた時代」、「林竹二のいた時代」をテーマに講義する機会があった。その折、これまでにこの二人の名を知っていたかを尋ねてみたが、誰一人手は挙がらなかった。

そのとき、宮教大だったらどうなのだろうと思いを馳せたのだ。

宮教大では卒業生はもちろん現役学生でもその名を知り、教育の研究と実践における二人の業績に、ぜひ関心を寄せてほしいものである。

「思い出」裏話



宮城教育大学
名誉教授
高木 力雄

宮教大創設構想の当初は、雨宮地区の東北大農学部跡地が建設候補地であったことは、ご存知でしょうか。同窓生の多くが教育実習で学んだ上杉地区の附属学校の道路を挟んだ向かいに、宮教大が建設されるはずだったのです。それが、農学部教授会の移転反対決議によって夢となり、宮教大は久保田山へと追いやられてしまった。当時私は、東北大教育学部に在学中で、宮教大への分離創設反対のデモにも参加していました。最終学年のある日、卒論指導教官の恩師海鋒修先生に誘われて、「ここが宮教大の用地」という開拓跡地の久保田山を見に行った時は、「こんな所に」と愕然としたことを、今でも鮮明に覚えています。私の卒業二年後に、宮教大は富沢地区の暫定施設からスタートし、

その後青葉山キャンパスとして整備されてきました。

卒業してからの私は、在仙の私立大学に十五年勤務した後、縁あって宮教大の専任教員となって、二十五年も働かせていただきました。非常勤講師期間も合わせると、青葉山ゴルフ場を目の前にした宮教大キャンパスに、三十年以上も通ったことになりました。ところが今や宮教大の周辺は、その様相を一変させ、真新しい東北大の施設群に囲まれてしまい、なんとあの農学部までもが、青葉山に来てしまったのです。今青葉山のあの周辺を通るたび、私の中には、口惜しさの混ざった複雑な思いが渦巻いて仕方ありません。



移転当時の宮教大（1968年）

同窓会誌三十号には相応しくなく、一退職教員のざれ言で失礼しました。

善意のリレーの中で



宮城教育大学名誉教授
中学校教員養成課程
国語専攻
昭和四十七年卒
相澤 秀夫

昨年五月の夕刻、一本の電話がかかってきた。声の主は橋本俊一さんである。「お願いがあるのですが…」ややトーンの高い、透明感のある声が耳に響いた。長年アナウンサーとして磨かれたプロの声である。「同窓会誌『山にありて』が三十号を迎えます。ついては、力を貸してほしいのですが…」ある時期、しばらく事務局を担当した者として、「三十号」という言葉にある種の感慨を覚えた。そして様々な思いがよみがえってきた。会誌は同窓会の顔である。そして、その歩みと重なる。本同窓会は、大学からの要請で設立された。当初は附属小学校に事務局が置かれ、池田良さんや竹

田幸正さんが会報の仕事も担当された。その後、大学に事務局が移され、渡辺徹さんや小野元久さんが事務局を引き継いだ。小野さんのあとが私である。

事務局が大学に設置されてからは、会報担当理事として、橋本さんがその仕事を一手に担ってくださった。会報の仕事を一人的善意に頼ることはいかなものだろうか。

こうした状況を改善すべく、編集委員会を立ち上げることにした。毎号十人程に依頼し、企画や原稿依頼、誌面の割り付けや校正等の仕事を分担していただいた。現在まで、延べ二百数十名を数える。寒い師走の夕刻、仕事帰りに大学の研究室に集まり、編集の仕事がされる編集委員の姿は、私の脳裏に刻まれている。感謝しかない。今もその中心に橋本さんはいる。同窓会誌『山にありて』は、橋本氏をはじめとする多くの人々の善意の輪、善意のリレーの中で刊行されてきた。これからも、学びのふるさとである大学からの年に一度の「ふるさと便り」を楽しみにしている。

林竹二先生と中国と私



中学校教員養成課程
国語専攻
昭和四十七年度卒
阿子島茂美

早期退職をして北京で五年間暮らすことにした。職があったわけではない。とりあえず中国の子どものとの出会いを期待して、二〇〇五年秋に中国へ向かった。古い二十一階建てアパートの十三階に住み始めた。二十日目の朝、部屋が火事になった。その時はまだ「火事！」という中国語も知らなかったが、隣の老夫妻に助けられたりして、何とかあった。刺激的なスタートだ！と思った。路傍で物乞いする手足のない子ども、流行の服を着て、高級デパートで買い物をする若者、村にお金をもたらすことは幸福なことと日本留学の夢を見る新疆ウイグル自治区の若者。打工子弟学校（出稼ぎ労働者によって設立された非正規の学校）の子どもたちの笑顔。小学校教員が日常であった時とは違った子ども

の風景が見えた。



一九六九年に入學。期末試験の朝、大学に行くとき校舎がバリケード封鎖されていた。学長の林竹二先生は封鎖された校舎二階の教室に梯子を使って入る。電気も机も無いシーンと音がしそうな教室でプラトンの「饗宴」を読んだ。林先生が教師とは何かを熱心に語った姿が私の原風景である。学園紛争の時代、教師が語り学生が聞く日常の授業が違って見えた。非日常との出会いはそれが偶然と必然



打工子弟学校の授業風景

の結果であることに気づかせてくれる。バリケード封鎖の読書は林先生が置かれた状況の中で人ができることを問いかけているように思った。

(東京都小平市在住)

尊い時間と縁



小学校教員養成課程
教育学ピーク
昭和五十七年度卒
生中 信行

二年生の時に教育学ピークを選んだ。授業をするのが不安で、飛び込んだのだと思う。研究室に入り先輩方の話を聞いてみると、どうも卒業した先輩の授業を見に行くらしい。付いていった。驚いた。卒業しても授業づくりで繋がっているのか。

国語の授業だった。教材は、宮沢賢治の『永訣の朝』。衝撃だった。私にとって、まったく内容の分からない詩を子どもたちの力を結集して理解していくのである。子どもたちは、素材で自由闊達という印象だ。

昨日のことにように子どもたちの表情、先輩教師の語り口、教室の設えも思い出す。こんな子どもたちが育つのか？最後に『永訣の朝』を二人が指名朗読した。圧倒された。授業前と全く違った朗読にふくらんでいた。その時、初めて、『あめゆじゅとてちてけんじや』の意味が分かった気がした。子どもの朗読から伝わってきた。やられたって感じた。休み時間になった。その先輩教師は、子どもから慕われ、いいようにいじられてもいた。まったく権威を感じなかった。かっこいい。憧れた。こんな授業ができたなら……。どんな見えない仕事があるのだろうか。知りたくなった。

あれから三十一年、その先輩教師の授業に連れて行ってくださった『横須賀 薫先生』を勤務校にお招きし『教師の仕事』というテーマで全市に向け講演いただいた。学校の授業研究に何度も足を運んでいたが、教材の本質も見抜く教材研究、『子どもがみえる』ための視点をご指導いただいた。尊い時間になった。

(横浜市立上山小学校勤務)

継続は力なり



小学校教員養成課程
芸術・体育系美術コース
平成七年度卒

野呂 英樹

同窓会会報誌三十号おめでとう
ございます。会報を手取るた
びに、中国に留学した二年間を含
めて六年間在籍した母校を懐かし
く思い出します。

学生時代の思い出と言えば、大
学祭の復活です。私が入学した平
成二年は大学祭がありませんで
した。入学してみても驚いたのだ
が、実は、それまでの数年間、学
生大会が成立しない等の理由で大
学祭が開催されない年が続いてお
り、地元新聞に「教員養成大学な
らば大学祭も開けない」などと投
書されてしまうような状態でした。

翌年、畠山和也くんを中心とし
た学生自治会の頑張りで学生大会
が成立、予算が使えることになり
数年ぶりに大学祭を開催すること
が出来ました。平成三年、第二十
回大学祭のテーマは、「復活」。仲

間たちと、まさにゼロから作り上
げた大学祭でした。

私自身は、第二十回と第二十一
回の大学祭実行委員長を務めさせ
ていただいた後、中国吉林省の東
北師範大学に留学するために二年
間休学しましたが、大学祭実行委
員会は、その後も、第二十二回猪
ヶ倉将貴委員長、第二十三回赤木
聡委員長、第二十四回黒川修行委
員長と、優秀な後輩たちがしっか
りと引き継いでくれました。

その後、東日本大震災など難し
い時期もあったかと思いますが、
今まで途切れることなく大学祭の



歴代の大学祭実行委員長たちと

開催が続いていることを、誇りに
思っています。

今年度で四十七回目の大学祭と、
三十号の同窓会会報誌。五十三周
年を迎えた母校の発展とともに、
これからもますます愛される存在
として、末永く続いていくことを
願っています。

(宮城県庁勤務)

志の原点



学校教育教員養成課程
国語教育専攻
平成二十年度卒

菅原 和朗

宮城教育大学では、学部と教職
大学院の六年間を過ごした。この
中に、「宮城の中学校」の国語教
師を目指そうと思った原点がある。
秋田県出身の私は、入学したば
かりの頃、地元の高等学校教員を
目指していた。しかし、大学での
数々の出会いによって、宮城の中
学校教員を志すようになった。

宮教大での六年間において、人
生の転機とも言える出会いが二つ
ある。一つは、附属中学校(当時)

の高橋彰吾先生との出会いである。
三週間の教育実習の中で、子ども
との向き合い方や、中学生がもつ
可能性について情熱的にご指導い
ただいた。この三週間を通して、
私は「中学校」という教育現場に
強く心引かれるようになった。

もう一つは、国語教育講座(当
時)の相澤秀夫先生との出会いで
ある。学年担任、卒業研究の指導
教員、教職大学院のユニット長と
して、国語教師としての基礎・基
本を教えていただいた。特に、教
職大学院生でありながら、全国各
地の研修会に相澤先生の随行員と
して参加させていただいた日々は、
この上なく贅沢な時間だった。

相澤先生と高橋先生のおかげで
「宮城の中学校」の国語教師にな
るという目標が生まれた。先日、
両恩師と再会する場があった。酒
席を共にしながら、教職七年目の
自らの未熟さを痛感した。同時に、
憧れの念を力に変え、更なる研鑽
に励みたいと強く思ったのである。
私の志の原点が、青葉山で過ごし
た六年間にあることを再確認でき
た時間であった。
(宮城教育大学附属中学校勤務)

特集2

30号を振り返る データから見る 同窓会会報誌

私が同窓会会報誌の編集に携わったのは、平成6（1994）年3月発行の4号からですから、すでに四半世紀関わったこととなります。手元にある1号から29号までのファイルを見ると懐かしさとともに隔世の感を覚えます。

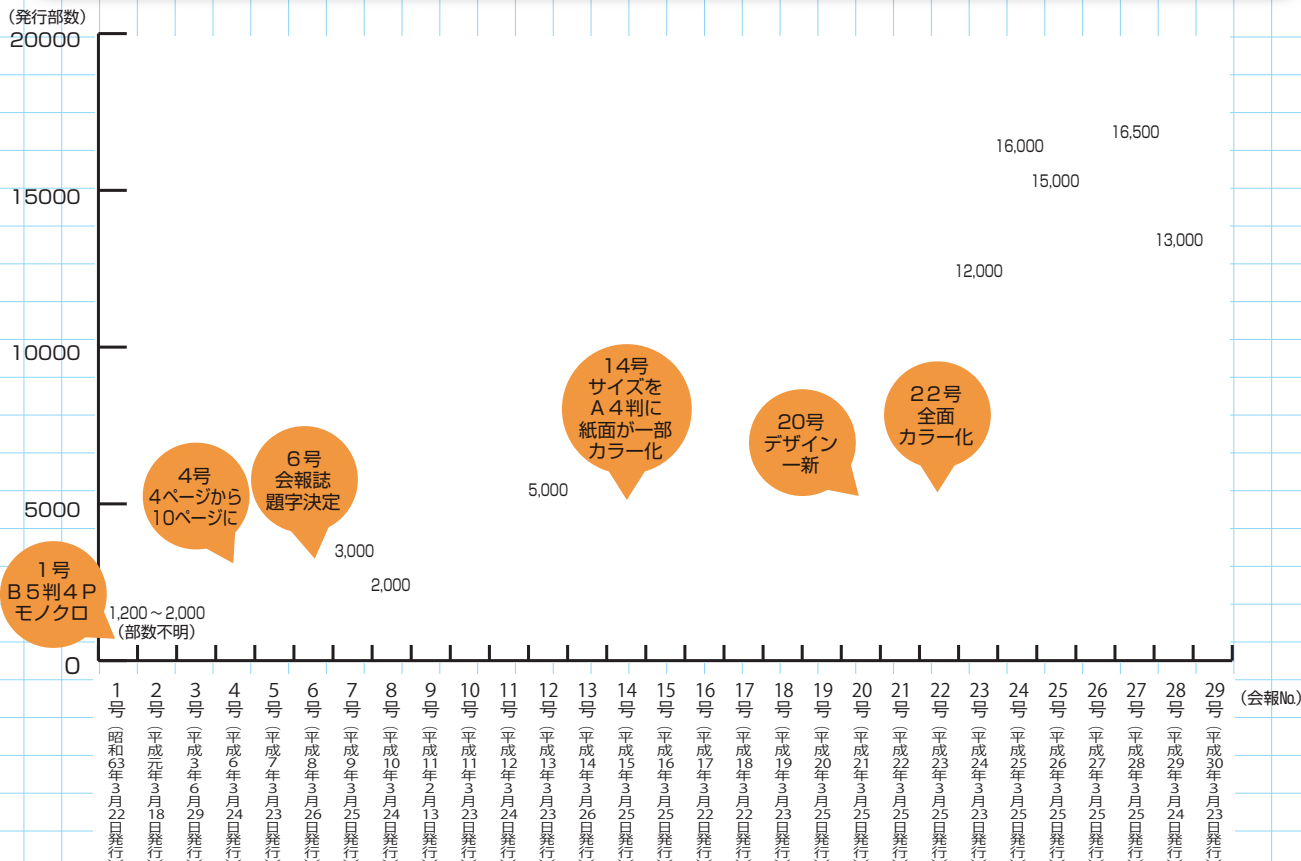
特集2では、これまでの同窓会会報誌の表紙をすべて掲載して振り返るとともに、発行部数の変遷・卒業生の居住地の分布を発送先から明らかにしてみました。また、同窓会の開催年表と講演者名・演題一覧、ならびに、会報の「特集」一覧もまとめて掲載しました。
（同窓会担当理事 橋本 俊一）



**同窓会会報誌
の内容と
発行部数の
変遷**

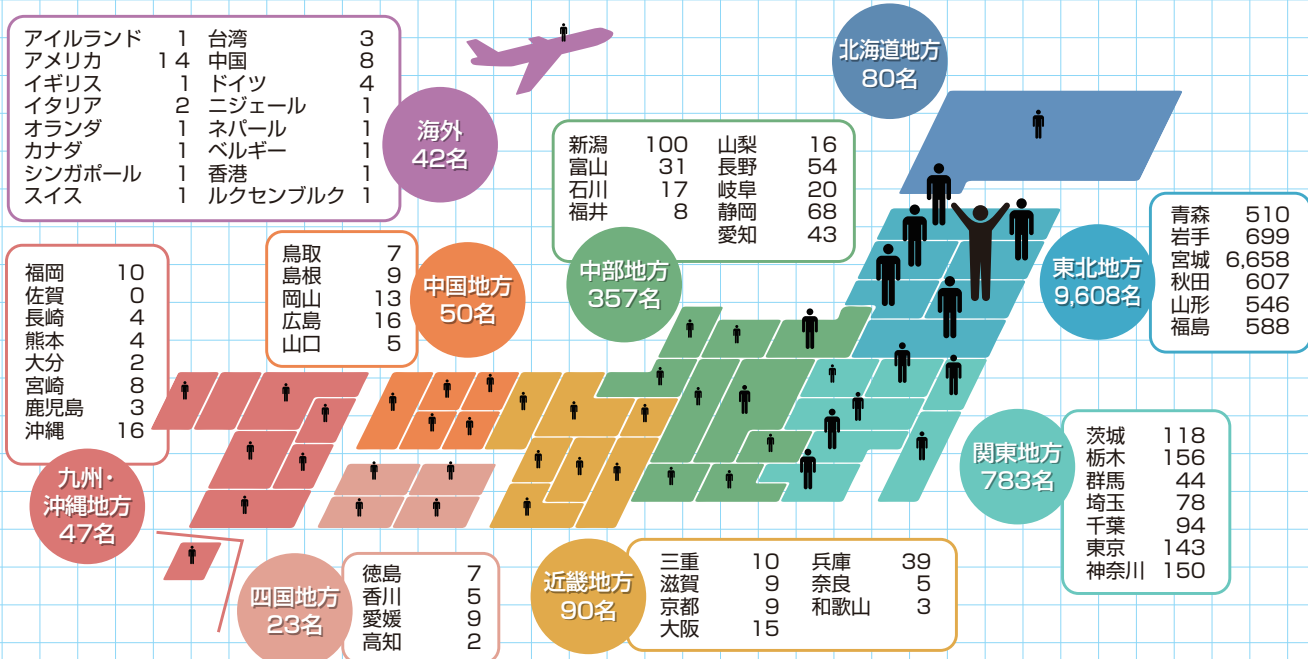
1号から3号までは7回生の竹田幸正さんが編集を担当。同窓会設立にも関わった竹田さんは、会報紙発刊の必要性について「同窓会設立の経緯を記録しておくべき」「同窓会を社会的にも認知してもらうことが大切」と書かれています。モノクロB5版4ページだった第1号が、14号でA4版14ページ一部カラーとなり、22号には16ページの全面カラーとなりました。同窓会報があったからこそ、大学の変遷をはじめ先生方の動向や同窓会の開催記録等が残り、貴重な資料になっていると思われます。

その後4号から10号まで橋本俊一が編集長を務めた後、当時同窓会事務局長の相澤秀夫さん（5回生）のご助言で編集委員会が発足しました。末永精悦・千葉拓哉・西島（高橋）洋子・岡崎徹・横橋雄市・浅野郁子・近藤（今野）ゆき・加藤良樹・野中映里と編集長が受け継がれて30号を迎えています。（編集委員会）



**都道府県
別在住者**

現在、同窓会費が納入されていて住所が判明している卒業生に会報を送付しています。会員宅へ発送している会報紙を、諸般の事情で今後宮教大HPでの閲覧に切り替えようという動きが出ています。閲覧方法と配布方法が変わっても、「大学と卒業生のパイプ」「卒業生同士の交流」を目的とする「同窓会報 山にありて」を今まで以上に充実させていきたいと思っています。（編集委員会）



◆ 同窓会開催年表

年度	実施日	会場	参加人数	総会での記念講演
S 62	S 63. 2. 20	宮城教育大学講堂	200越	「教員養成四十五年」 宮城教育大学 前学長 大塚 徳郎 氏
H 1	H 1. 9. 2	仙台共済会館	40	「回想」 宮城教育大学 学長 菅野 正 氏
H 2	H 2. 8. 25	ろっふく会館		
H 3	H 3. 8.	KKRホテル仙台		
H 4	H 5. 2. 6	KKRホテル仙台	27	
H 5	H 5. 8. 21	KKRホテル仙台		「林竹」と斎藤喜博 宮城教育大学 教授 横須賀 薫 氏
H 6	H 6. 8. 20	KKRホテル仙台		「国語科教育は、言葉の教育であったか」 宮城教育大学 教授 渋谷 孝 氏
H 7	H 7. 8. 19	KKRホテル仙台	38	「八工の住む色の世界」 宮城教育大学 教授 福士 尹 氏
H 8	H 8. 8. 17	KKRホテル仙台	22	「社会主義リアリズムとは何であったか」 宮城教育大学 教授 森田 稔 氏
H 9	H 9. 8. 30	KKRホテル仙台		「私の宮教大三十年」 宮城教育大学 教授 渡辺 雄彦 氏
H 10	H 11. 2. 13	KKRホテル仙台	約150	創立十周年記念総会 「言葉へのこだわり」講義への径 宮城教育大学 名誉教授 橋浦 兵一 氏
H 11	H 11. 8. 28	KKRホテル仙台	約100	「講義片々」 宮城教育大学 名誉教授 村瀬 隆一 氏
H 12	H 12. 8. 19	KKRホテル仙台	100超	「なぜ学べないのか」 宮城教育大学 教授 西林 克彦 氏
H 13	H 13. 8. 18	KKRホテル仙台	100超	「心の担任をめざして」 仙台市教育委員会教育長 阿部 芳吉 氏 (S 46年度卒)
H 14	H 14. 8. 17	KKRホテル仙台	100超	「岩沼市の福祉と教育」 岩沼市長 井口 経明 氏 (S 43年度卒)
H 15	H 15. 8. 9	KKRホテル仙台	約100	「教育の冒険」 フリーライター 大泉 浩一 氏 (S 58年度卒)
H 16	H 16. 8. 7	KKRホテル仙台		「宮教大を出て三十年」 東北放送 橋本 俊一 氏 (S 48年度卒)



◆ 宮城教育大学同窓会会報「山にありて」 特集一覽

- 第1号 「同窓会発足」(創刊号) 編集長 竹田 幸正
- 第2号 「第二回総会報告・教員養成四十五年」(記念講演記録)
- 第3号 「同窓会発足からこれまで」
- 第4号 「教員にならなかつた卒業生」 編集長 橋本 俊一
- 第5号 「教員にならなかつた卒業生PART II」
- 第6号 「宮教大創立三十周年」
- 第7号 「今年はたつた四人」
- 第8号 「同窓会十周年に寄せて」 「各界で活躍する卒業生」
- 第9号 「同窓会十周年記念号」
- 第10号 「宮教大は出たけれど…」
- 第11号 「新世紀の宮城教育大学に期待する」 編集長 末永 精悦
- 第12号 「大学の教員養成を考える」
- 第13号 「人を育てる―新しい学校作りから」 編集長 千葉 拓哉
- 第14号 「人を育てるⅡ」 西島(高橋)洋子
- 第15号 「独立行政法人化に期待する」 編集長 岡崎 徹

H 30	H 29	H 28	H 27	H 26	H 25	H 24	H 23	H 22	H 21	H 20	H 19	H 18	H 17
H 30 8. 4	H 29 8. 5	H 28 7. 30	H 27 8. 1	H 26 8. 2	H 25 8. 3	H 24 8. 4	東日本大震災のため中止	H 22 8. 7	H 21 8. 8	H 20 8. 2	H 19 8. 4	H 18 8. 5	H 17 8. 6
宮城教育大学講堂	ホテル白萩	ホテル白萩	KKRホテル仙台	KKRホテル仙台	KKRホテル仙台	KKRホテル仙台		KKRホテル仙台	KKRホテル仙台	KKRホテル仙台	KKRホテル仙台	KKRホテル仙台	KKRホテル仙台
101	80	82	72	71	72	92							
「人との出会いが自分を育てる」 宮城教育大学特任教授 鈴木 洋氏 (S53年度卒)	「3・11を学びに変える」 NPOカタリハアドバイザー 佐藤 敏郎氏 (S61年度卒)	「ラジオ制作という仕事に携わって」 エフエム仙台 石垣のりこ氏 (H9年度卒)	「震災で起こったことと閉上中学校の記録」 名取市立閉上中学校 八森 伸氏 (S59年度卒)	「教育の冒険―林竹二と宮教大の1970年代」 フリーライター 大泉 浩一氏 (S58年度卒)	「3・11 その時私は」 塩竈市教育委員会教育長 高橋 睦彦氏 (S48年度卒)	「理科教育の新たな視点」 NPO法人「田んぼ」理事長 岩淵 成紀氏 (S54年度卒)		「考古学から見た古代の宮城」 尚絅学院講師 白鳥 良一氏 (S43年度卒)	「仙台市史を編さんして」 仙台市博物館市史編さん室 鶴飼 幸子氏 (S44年度卒)	「環境教育の課題と可能性」 宮城教育大学 副学長 見上 一幸氏	「扶老携幼 背負肩挑」―極限状況下の家族愛― 宮城教育大学 学長 高橋 孝助氏	「宮城の教育の現状と課題」 宮城県教育委員会教育長 佐々木義昭氏 (S45年度卒)	「人生百年 笑顔が一番!」 岩沼市教育長 影山 一郎氏 (S43年度卒)

※肩書きは、総会当時のものです



サークル代表の挨拶 (2000年)



次回実行委員挨拶 (2002年)



第21回総会 (2005年)

- 第16号 「大学創立四十周年を迎えて」
編集長 横橋 雄市
- 第17号 「創立四十周年記念式典報告」
- 第18号 「教職大学院の概要」
- 第19号 「法人支援アドバイザー」
編集長 浅野 郁子
- 第20号 「二十号を迎えた会報誌」
- 第21号 「宮教大志し、教職を目指した時を経て〜後輩、現役生へのメッセージ」
- 第22号 「輝くために〜仕事も趣味も充実しています!」
- 第23号 「震災大特集 絆〜震災から一年これまでの道のりと復興へ向けて
絆〜大学との関わり」
編集長 近藤今野ゆき
- 第24号 「今後の国際交流・国際理解教育のあり方」 「海外実践と留学生」
編集長 加藤 良樹
- 第25号 「復旧から復興へ 支援センターから目指す方向」
- 第26号 「教育最前線〜英語教育とICT活用の取組」
編集長 野中 映里
- 第27号 「同窓生が綴る宮城教育大の五十年」
- 第28号 「ぶらり宮教大!!」
- 第29号 「宮教大でまた学ぼう!」
- 第30号 「祝 同窓会会報誌三十号」 「三十号を振り返る」

三十号を振り返る 歴代編集長よりメッセージ

会員相互の架け橋として



第一〇三号編集長
小学校教員養成課程
教育心理学ビーク
昭和四十九年卒
竹田 幸正

「山にありて」三十号の発刊、おめでとうございます。私が担当した創刊の頃と比べると、質と量の充実さには驚くばかりです。橋本会報担当理事はじめ歴代の編集委員の皆様のご熱意に心から敬意を表します。

さて、「宮城教育大学同窓会会報」一号は、第一回同窓会総会が開催された一か月後の、昭和六十三年三月二十二日に発刊されました。

当時の事務局は、総会の準備や同窓会名簿作成のことで手一杯で、会報どころではなく、発刊の話が出たのは総会後の懇親会の席でし

た。設立の経緯を記録しておくべき、同窓会を広く認知してもらうことが必要という意見がスタートです。

その後、会報は事務局の附属小が担当、新入生への周知のために三月末までに発刊することが決定。それから、印刷所の手配、原稿依頼と集約、校正と大変な作業でしたが、多くの方々の協力を得て二週間で完成することができました。

記念すべき創刊号の巻頭言は、「同窓会に想う」と題して、初代会長の菅野正先生にお願いしました。また、設立に深く関わった方々にも同窓会への思いや願いについてご寄稿いただきました。改めて読み返しますと、その頃の活気に満ちた理事会や事務局の様子が蘇ってきます。

同窓会設立の目的の一つに、会員同士の交流の機会を拡大することがあります。「山にありて」はこれから先もずっとその架け橋に

なってくれることでしょう。会報誌の一層の発展をお祈りします。
(宮城学院女子大学勤務)

思いをつないで



第二十二号編集長
小学校教員養成課程
文系国語コース
昭和六十二年卒
浅野 郁子

三十号発行おめでとうございます。三十号までバトンをつなぐメンバーの一員として関わることができたことをうれしく思います。

先輩方の優しいお誘いのり、楽しい編集会議に参加したのが始まりでした。また、のせ上手な先



第22号同窓会報告のページ

輩方ですので、「来年は浅野さんだね」という温かい笑顔にのせられ、二十号から二十二号まで編集長をさせていただきました。十二月の末に編集会議があり、テーマや特集の内容と執筆者、担当を決めて忘年会に突入するのが恒例でした。相澤先生や小野先生のお話ができること、橋本さんのすてきな声が聞けること、先輩方と同窓生というつながりの中で関わることもできたことはとても楽しいものでした。もちろん、年末年始に原稿依頼をするので、バタバタの冬休みを過ごしたのを思い出します。

二十二号をまとめ、橋本さんと最終確認をし、印刷業者に校了の連絡をした後に東日本大震災が起こりました。印刷をお願いしたものの、確認も連絡もできないまま、目の前のことに追われていました。完成できるのか不安でしたが、避難所対応という状況のため、何もできず過ぎました。後で完成を知ったときは、本当にほっとしました。編集に関わった皆さん、原稿執筆された方々、印刷業者の方々と、多くの人が手をかけ、思

いをつないだ同窓会会報だなどと、改めて実感した出来事でした。

(仙台市立福室小学校勤務)

一本の電話から



近藤 ゆき

第二十三号編集長
学校教育教員養成課程
国語教育専攻
平成十三年卒

ある日、職員室に一本の電話が、かかってきました。

「相澤秀夫先生からご推薦いただきました。」

この一本の電話が、同窓会会報誌の編集に携わるきっかけとなりました。

何も分からないまま、参加した編集会議。場所は、いつも、名掛丁にある「別館 すが井」でした。そこで編集長の計画に沿って話合いが始まります。編集委員がアイデアを出し、「その記事だったら、頼めそうな人がいるよ。」とすぐに名前が挙がり、担当が手際よく決められていきました。また、会議は大学でも行われました。集まった手書きの原稿を、一本の鉛

筆を持って確認します。文字数を調整したり、誤字脱字の確認をしたりと、パソコンを使わずに作業をしたのも、今では懐かしい思い出です。

そのような時、「若い人の声も反映させよう」という一言で、編集長をさせていただくことになりました。編集長とは名ばかりで、たくさんの方に支えていただいていた発行となりました。会報誌の記事を依頼するために、久しぶりに連絡を取った友人、初めてお電話をしてお願いをしたことも多くありました。突然の依頼にかかわらず、快諾して下さった皆様には感謝の言葉しかありません。



初の対談形式の第24号

り、宮教大の同窓生のつながりの素晴らしさを強く感じています。これからも、同窓生の心をつなぐ会報誌として、充実した内容を同窓生の皆様に、お届けできればと思っています。

(宮城教育大学附属小学校勤務)

読みたくなる 会報づくりをめざして



加藤 良樹

第二十四、二十七号編集長
小学校教員養成課程
社会系
平成六年度卒

大変光栄なことに、四号にわたって編集長を担当させていただきました。この間、大学の先生方、先輩、後輩、職場の上司、同僚、教え子など、約百五十人の方に原稿執筆をお願いし、そのすべての方に温かくご協力いただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

編集長として意識したことは、「多くの同窓生が読みたくなる会報づくり」です。中でも特に工夫したのは特集ページです。それまでお一人お一人の原稿を

繋いで組むことが多かった特集ですが、二十四号では、対談形式を取り入れました。日本人学校に勤務経験のある堤先生と海外での日本語教育に関心を持つ橋本さん、今後の国際交流・国際理解教育について食事をしながら和やかに話していただき、その様子を編集しました。二十五号では、宮教大の野澤先生と小田さんに当時の教育復興支援センターの取組についてインタビュー形式で取材しました。二十六号では教育最前線としてICT教育を取り上げ、二十七号では宮教大創立五十周年を記念して、各世代の同窓生から当時の思い出や宮教大への思いについてご寄稿いただきました。城間那覇市長に表紙を飾っていただくことができ、たこともありがたいことでした。

他にも大学構内の変化の紹介、新サークル紹介、家族全員が同窓生という「一家DE同窓生」など、それまでにない内容を取り入れさせていただきました。今後も、同窓生のニーズに合った、同窓生の絆を表す会報であってほしいと願っています。

(仙台市教育委員会生涯学習課勤務)

同窓会 ホーム カミングデー 報告

日時：平成30年8月4日
会場：宮城教育大学講堂
参加人数：101人

〔プログラム〕

1. 同窓会総会
2. 大学・同窓会合同催事
 第1部 特別講演
 「人との出会いが自分を育てる」
 宮城教育大学特任教授
 鈴木 洋
 第2部 平成22年度卒業式
 第3部 サークル発表
3. 大学・同窓会合同懇親会

これまで、大学の同窓会総会・記念講演・懇親会は仙台市内のホテルを会場に行われていましたが、今年度はホームカミングデーと合同開催として大学講堂で開催されました。より多くの同窓生が集う機会づくりとして、大学側のホームカミングデーと同窓会総会・懇親会の合同開催という初の試みとなりました。

懇親会は講堂前の広場で行われました。これまでの宴会場とは違う、屋外での立食・セルフ形式での懇親会に、少し戸惑いもありましたが、青空のもと、久しぶりの再会を喜び合い、思い出話に花を咲かせる同窓生の姿が見られました。

平成最後の同窓会

中学校教員養成課程・保健体育専攻
昭和六十二年度卒

矢部 鋼治



平成三十年度
同窓会総会につ

きまして、村松隆学長をはじめ多

くの御来賓の皆様や同窓生の御参加をいただき、無事に開催できましたことに心より感謝申し上げます。

今年度は、会場や内容を一新し、大学のホームカミングデーと併催という新しい形で実施することができました。

このことに伴い、会場は学内の講堂とし、内容もこれまでの記念講演に代えて、大学からの提案も



講堂に響きわたった学生歌

あり、東日本大震災の被害により開催されなかった平成二十二年度の卒業式が行われたことは大変意義深く、大きな成果であったと思います。

私自身もそうですが、多くの同窓生は、御無沙汰していた大学に到着した瞬間から懐かしさを感じるとともに、この地での経験が今日の自分を支えていることを実感していました。

懇親会も大学との共催とし、会場は講堂前のスペースで、料理や飲み物の手配も大学に甘えてしました。大学関係者や平成二十



青空のもと声高らかに乾杯

二年度卒業生の参加を受けて、これまででない盛り上がりを見せたいと思います。

先輩から引き継いだ重責ではありましたが、大学の提案に始まったホームカミングデーとの併催により、当初の不安を払拭し、とても実のある同窓会となりました。開催に当たって、大学に頼り過ぎってしまったことを反省する気持ちを感謝に変え、ともに運営に当たった同級生と出席いただいた全ての皆様に御礼を申し上げます。

(宮城県泉高等学校勤務)

人との出会いが自分を育てる

中学校教員養成課程・理科専攻
昭和五十三年度卒



鈴木 洋

私が今あるのは、恩師、先輩、同僚等多くの方々から支えられ、教えられ、育てられたからである。人生の終盤に差し掛かったから、強くそう考えるようになった。

ホームカミングデーと同窓会の合同開催での特別講演の依頼を受け、お世話になりっぱなしでは申し訳ない、幾らかでもお役に立てるならという思いから『人との出会いが自分を育てる』と題し、恩師や先輩等以外で、多くの方がご存じの方との出会いについて話をすることにした。

一人目は、陸上の村山紘太選手。毎年広島で開催される「都道府県対抗駅伝大会」に宮城県代表として最終区に出場した。当時、リオオリンピックへの出場やアキレス腱痛という課題を抱えながらも

「宮城県のためにこの大会で走ります」と自分のことよりも郷土のために痛みに耐えながらも懸命に走っていた。

二人目は、卓球の張本智和選手。史上最年少優勝した世界ジュニア選手権の祝勝会で、張本選手の志の高さや確かな実行力、謙虚さに魅了された。それから僅か二年、張本選手の世界ランキングは三位と、最強中国の牙城に迫っている。他にも、東京オリ・パラにつながる「千km縦断リレー」に参加してくださった女優の小林綾子さん。



講演「人との出会いが自分を育てる」

直接お会いしたことはないが、数多くの記録を残したメジャリーガーのイチロー選手。第二次世界大戦中約六千人のユダヤ人の命を救った杉原千畝さん。そして本学第二代学長の林竹二先生の話をした。人は、自分を育ててくれた人との忘れられない物語を幾つか持っている。

(宮城教育大学特任教授)

三十年ぶりの再会

小学校教員養成課程・社会系
昭和六十二年度卒



矢口 晃

「同窓会総会の実行委員を頼みたい。」

前実行委員長から声が掛かったのは、今回の同窓会開催日の一年以上も前のことでした。

昔の仲間にあわなくなつてから三十数年、同窓会と言われても動き出すエネルギーが湧いてこないところが正直ありました。しかし、先輩からの依頼でもあり、久しぶ



思い出話に花咲く立食パーティ

りに仲間にあう期待感もあつて、実行委員を引き受け、今回の同窓会総会を迎えることとなりました。久しぶりに会う仲間は、あの子の面影が残っており、とても懐かしく感じました。と同時に、三十年の時の流れも感じさせてくれました。みんながいい感じの大人になっていました。それぞれが今置かれた立場で精一杯頑張っていることも感じました。大学時代お世話になった学生課の奥山さんにも会えました。やはり来て良かったです！素直な感想です。少々疲れ気味だった私ですが、三十年ぶりの再会に、十分なエネルギーをもらったと思えました。

同窓会での再会の時間はあっという間に過ぎてしまいました。もしかすると、どこかの街角で出会うことがあるかもしれません。そんなときは

「おうつ、久しぶり！」

と声を掛け、また再会を喜び合いたいと思います。そんな日が来ることを楽しみにしながら、今日も明日も仕事にまい進していきます。

(岩沼市立岩沼小学校勤務)

子どもの成長と幸せを願って



中学校教員養成課程・美術専攻
昭和六十二年度卒

瀬戸千恵子

久しぶりに訪

れた宮城教育大学の巨木を思わせる構内の木々の大きさに、時間の経過を感じながら、講堂の二階で実行委員の人たちと卒業以来の再会を果たしました。三十年ぶりとは思えぬ変わらぬ笑顔に迎えられるながら、例年とは違う同窓会の準備が始まりました。

た。

例年と違うとは、東日本大震災のために卒業式ができなかった

「平成二十二年度卒業生卒業式」を卒業証書の代わりに記念品を授与する形で行うというものでした。

村松隆学長のいかに君たちのことを案じ、この日を迎えたかつかの熱い思いと、それに呼応するような卒業生の涙と笑顔を、私は記念品授与の介添えとして間近でその瞬間に立ち会えたことに感謝しています。子どもの成長と幸せを願い最善を尽くす教師の在りようを体現していると胸が熱くなりました。

また、赤ちゃんを抱きかかえながら「先生に見せたかった」という卒業生の姿に会場は温かな優しい空気に包まれ、和やかな時間ともなりました。

その後、なんと講堂前の広場にテントを立て、立食による懇親会が行われ、学生に戻ったかのように、再会を喜び合い、近況を語り合い、楽しく過ごすことができました。「女子寮でも、集まってみよう」という話に発展する場ともなり、「例年とは違う同窓会」へ

の参加は、原点回帰し、大切なことを得るかけがえのない機会となりました。

(石巻市立河南西中学校勤務)



緑に囲まれさわやかな笑顔で

平成 31 年度 (第 32 回) 同窓会総会第一次案内

平成 31 年度 (第 32 回) の同窓会総会は、下記の要領で開催されます。皆様のご参加をお待ちいたしております。

記

〔日時〕 2019 年 8 月 10 日 (土) 午後 2 時 〔会場〕 宮城教育大学

実行委員 / 昭和 63 年度、平成 10 年度、平成 20 年度卒業生

※平成 30 年度と同様に宮城教育大学ホームカミングデーとの同日開催を予定しています。

平成 29 年度 庶務報告

- (1)総会開催 平成 29 年 8 月 5 日 ホテル白萩 (2)理事会開催 平成 29 年 8 月 5 日 ホテル白萩
- (3)総会実行委員会設立 昭和 61 年度、昭和 62 年度、平成 8 年度、平成 18 年度卒業生担当
- (4)会報「山にありて」29 号発行
発行後、宮教大名誉教授の島森哲男先生から誤りをご指摘いただき、以降の送付分については訂正文を挿入する形で対応しました。
- (5)学生自主活動支援

平成 29 年度 会計報告

- (1)会計期間 平成 29 年 4 月 1 日から平成 30 年 3 月 31 日
- (2)収支概況 収入総額 6,473,847
支出総額 6,473,847
差引残額 0
- (3)繰越金の処理について **積立金+繰越金計 3,780,217** 次年度繰越金 3,780,217
積立金 0
- (4)財産状況 (平成 30 年 3 月 31 日現在額) **現金・預金合計 6,365,217**
現金 426,416
預金 2,454,001 (ゆうちょ銀行 普通預金)
3,484,800 (ゆうちょ銀行 振込用口座)

*繰越金から積立金を区分して表示する目的は当該年度の収支状況をわかりやすくするためです。
*現段階では積立金の目的は決まっていません。
*今後、積立金を取り崩して収入の部に組み入れる際は総会で承認を受けるものとします。
*平成 29 年 8 月 5 日開催の理事会の決定により、七十七銀行普通預金口座は平成 29 年 11 月 15 日に解約しました。

- (5)補足
*会費収入について、平成 28 年度は 522 名 (在学生 328、卒業生 194) から納入があったのに対し、平成 29 年度は 428 名 (在学生 320、卒業生 108) から納入があり、前年度比 752,000 円減となりました。
*卒業記念品としてクリアファイル (5 色) を作成し、平成 30 年 3 月の学位記授与式にて学部卒業生および大学院修了生に贈呈しました。同窓会の知名度向上および会費納入促進を目的とした広報活動の一環でもあるため、平成 30 年度以降は広報費として計上するのが適切と考えられます。

1. 収入の部

項目	29 年度予算額	29 年度決算額	比較増減額 (△減)	備考
1. 前年度繰越金	2,989,016	2,989,016	0	
2. 会費	2,400,000	3,424,000	1,024,000	428 名 (在学生 320 名、卒業生 108 名)
3. 利子	20	31	11	
4. 雑収入	0	60,800	60,800	寄付 (平成 29 年度総会実行委員会)
合 計	5,389,036	6,473,847	1,084,811	

2. 支出の部

項目	29 年度予算額	29 年度決算額	比較増減額 (△減)	備考
1. 事務費	100,000	76,450	△ 23,550	
(1) 事務費	15,000	14,912	△ 88	
(2) 通信費	25,000	17,956	△ 7,044	
(3) 人件費	50,000	38,900	△ 11,100	
(4) 会議費	10,000	4,682	△ 5,318	
2. 事業費	3,185,000	2,575,640	△ 609,360	
(1) 総会費	100,000	46,006	△ 53,994	会場料・講師謝礼 (懇親会料金は除く)
(2) 会報発行	700,000	644,589	△ 55,411	山にありて 29 号 13,000 部
(3) 会員情報管理費	1,200,000	1,144,081	△ 55,919	データ管理等
(4) 学生活動援助	700,000	643,042	△ 56,958	2 回、計 15 件
(5) 広報費	100,000	97,922	△ 2,078	新入生用入会案内、HP 更新
(6) 事務局業務委託費	385,000	0	△ 385,000	次年度に支出予定
3. 雑費	0	0	0	
4. 予備費	2,074,036	41,540	△ 2,032,496	卒業記念品 (クリアファイル)
5. 寄付	30,000	0	△ 30,000	
(1) 大学業務等支援寄付金	30,000	0	△ 30,000	次年度に支出予定
6. 積立金	0	0	0	
7. 次年度繰越金	0	3,780,217	3,780,217	
合 計	5,389,036	6,473,847	1,084,811	

3. 積立金の部

項目	29 年度予算額	29 年度決算額	比較増減額 (△減)	備考
1. 積立金	2,585,000	2,585,000	0	
(1) 前年度繰越金	2,585,000	2,585,000	0	
(2) 平成 29 年度積立	0	0	0	

平成 30 年度 事業計画

- (1)総会開催 平成 30 年 8 月 4 日 宮城教育大学 (2)理事会開催 平成 30 年 8 月 4 日 宮城教育大学
- (3)総会実行委員会設立 昭和 62 年度、昭和 63 年度、平成 9 年度、平成 19 年度卒業生担当
- (4)会報「山にありて」30 号発行 (5)学生自主活動支援

平成 30 年度 予算

単位 (円)

- (1)会計期間 平成 30 年 4 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日
- (2)収支概況 収入総額 6,180,247
支出総額 6,180,247
差引残額 0

* 予備費を増額する目的
予算執行の基本方針は当該年度の収入の範囲で活動 (支出) を計画します。但し、当該年度中に予想を超える事態が発生 (例えば震災) した場合に備えて「予備費」と計上します。
10 万円を超える予備費の執行に当たっては臨時理事会を開催して決着します。

1. 収入の部

項目	29 年度決算額	30 年度予算額	比較増減額 (△減)	備考
1. 前年度繰越金	2,989,016	3,780,217	791,201	
2. 会費	3,424,000	2,400,000	△ 1,024,000	(300 名 × 8,000 円)
3. 利子	31	30	△ 1	
4. 雑収入	60,800	0	△ 60,800	
合 計	6,473,847	6,180,247	△ 293,600	

2. 支出の部

項目	29 年度決算額	30 年度予算額	比較増減額 (△減)	備考
1. 事務費	76,450	40,000	△ 36,450	
(1) 事務費	14,912	15,000	88	
(2) 通信費	17,956	20,000	2,044	
(3) 人件費	38,900	0	△ 38,900	
(4) 会議費	4,682	5,000	318	
2. 事業費	2,575,640	3,710,000	1,134,360	
(1) 総会費	46,006	20,000	△ 26,006	講師謝礼、懇親会費用
(2) 会報発行	644,589	800,000	155,411	山にありて 30 号 13,000 部
(3) 会員情報管理費	1,144,081	1,200,000	55,919	データ管理等
(4) 学生活動援助	643,042	500,000	△ 143,042	
(5) 広報費	97,922	145,000	47,078	新入生用入会案内、卒業記念品
(6) 事務局業務委託費	0	1,045,000	1,045,000	前年度未払分 (385,000)、(55,000 × 12 ヶ月)
3. 雑費	0	0	0	
4. 予備費	41,540	965,247	923,707	
5. 寄付	0	50,000	50,000	
(1) 大学業務等支援寄付金	0	50,000	50,000	ホームカミングデー支援
6. 積立金	0	1,415,000	1,415,000	
7. 次年度繰越金	3,780,217	0	△ 3,780,217	
合 計	6,473,847	6,180,247	△ 293,600	

3. 積立金の部

項目	29 年度決算額	30 年度予算額	比較増減額 (△減)	備考
1. 積立金	2,585,000	4,000,000	1,415,000	
(1) 前年度繰越金	2,585,000	2,585,000	0	
(2) 平成 30 年度積立	0	1,415,000	1,415,000	

7年越しの「卒業おめでとう」



宮城教育大学 平成22年度卒業式



今年のホームカミングデーの目玉は、平成22年度卒業式でした。この年は、東日本大震災の発生のため開催できませんでした。そこでその年の卒業生に呼びかけてホームカミングデーの大学に来てもらい、卒業式を開催することになったのです。

当日は、参加の呼びかけに応じて、各地から33名の卒業生が集まりました。村松学長が「銭のことは」を述べた後、卒業生が専攻・コースごとに紹介され、壇上に上がり、記念品を手渡されました。「銭のことは」において、村松学長が7年前の震災当時の様子を思い出され、途中で涙ぐむ場面がありました。また、7年前に手渡されるはずであった卒業証書（学位記）を村松学長に読み上げてもらう場面もあり、会場から大きな拍手で祝福されました。子供連れの卒業生も複数参加され、ほほえましい雰囲気の中で式が行われました。

七年後の卒業式



宮城教育大学
名誉教授
佐藤 雅子

平成三十年八月四日、同窓会の総会の中で、東日本大震災の年に出来なかつた卒業式が開催された。

幼児教育の佐藤哲也教授から、お知らせをいただいて参列することができた。震災以来七年経って、県内外でそれぞれ仕事を不得て頑張っている姿に出会えてとても嬉しかった。

あの震災が起きた三月十一日午後、私は研究室の片付けに追われていた。突然来た強い揺れに驚いて研究室から外に避難して八号館の庭で揺れが収まるのを待った。まもなくグラウンドに集まるように学内放送があり、集まった学生と教職員で無事を確認し合って解散したが、その時大惨事が起きていることなど知らず「気をつけて帰ってね。また明日。」と声をかけただけで別れた。しかしその明

日は来なかつた。

電気・ガス・水道が出なくて食べるものも無くて、あの頃は自分の身のまわりのことだけで精一杯だった。グラウンドで別れた学生達のが気がかりだったけど何も出来なくて申し訳なかつた。電車が動かず、長蛇の列に並んでバスを乗り継ぎ青葉山に通った。定年退職後は六号館四階に研究室をお借りした。

大学の授業が再開した五月の連休明けに、卒業生が訪ねて来てくれ、始まったばかりの職場の話や同級生の消息など聞けて嬉しかった。

四年目の十二月には、ほとんどの卒業生が集まって会食をすることができた。

そして七年経って、大学の講堂で卒業式が開催された。三月の華やかな卒業式ではないけど、村松学長の優しい、温かいお言葉に胸が熱くなった。自身の定年退職と同時に送り出すはずだった卒業生にやっと「卒業おめでとう！」と言えた。

忘れられない日々



初等教育教員養成課程
幼児教育コース
平成二十二年卒業
田中 彩都

あの日は、八号館にいました。お世話になった佐藤雅子先生の研究室を片付けていました。

想像を超える揺れの後、避難指示で仲間とグラウンドに集まりました。被害の大きさと恐ろしい光景を知ったのは、電気が復旧してからでした。

卒業式が中止となり、私たちの大学生活も終わりました。東京で



コースごとに記念品を授与



学位記を授与される及川さん

の就職を控え、被災地から逃れるように引越しました。

初めて赴任した小学校で、宮城大大学院の卒業生、佐々木先生とお会いし、救われました。無我夢中で過ごしてきた七年間、いつも寂しさを痛感していましたが、クラスの子どもたちや保護者の方が卒業証書を作ってください、励まされたこともありました。

今回の卒業式開催は、佐々木先生が、前学長の見上先生に、卒業式がまだ行われていないことを伝えてくれたことがきっかけになったと聞いています。

震災から七年を経過して行われた卒業式、恩師や仲間との再会、学生時代に講義を受けていた村松先生からのお言葉、すべてが感動

的でした。

止まっていた時間が少しずつ動き出し、心残りも消えました。

このような機会を作ってください。ありがとうございます。

(世田谷区立松丘小学校勤務)

三十歳の卒業式



初等教育教員養成課程
家庭科コース
平成二十二年卒業
及川 敏江

七年五ヶ月。まさか、こんなに経ってから卒業式を挙げることになるとは、夢にも思いませんでした。

あの日、一号館四階の研究室で被災しました。卒業式の後の謝恩会について話し合っている最中でした。当時は「卒業式をしたい！」なんて声高らかに言えるわけもなく、恥ずかしい話ですが、何となくけじめを付けられないまま社会人になりました。四月に入ってから学務課で学位記を受け取り、偶然大学に来ていた友達と写真を撮

って「卒業記念だね。」などと笑っていたのを覚えています。

当然ですが、私には袴を着て、学位を持って友人と取った写真は一枚もありません。ですから、卒業式ができると知ったときは本当に嬉しく思いました。

久しぶりに訪問した母校。二号館の堂々たる佇まいはそのまま。並木のトンネル。(こんなにも鬱蒼としていたっけ?) 四年間通ったサークル室の古びたにおい。当時の記憶が一気によみがえり、懐かしさに一際輝いて見えました。式では、同級生同士で結婚した人や、子どもを連れてくる人もおり、改めて月日の流れを感じました。

村松先生からの祝辞は、二〇一一年三月二十五日、卒業式の日タイムスリップをして、これから社会人になる私たちへ向けられたものでした。私たちに思いを馳せていただけたことに深く感動しました。

最後になりますが、このような機会を与えてくださった運営の皆様、心より感謝申し上げます。

(仙台市在住)

生 窓 同 窓 DE 家 一

小学校教員養成課程・社会ヒーク
昭和六十年年度卒業

鈴木 久幸（父）

宮教大では、地理学の小金澤先生の下で学んだことが最も印象に残っています。自分の足で農家や農協をまわり、卒論を仕上げました。あまりにも切羽詰まり、大晦日もアルバイトで過ごしたほどです。その経験が、教員になっても生き、地域の農業について教材化し、農家の仕事や農産物の流通について楽しく授業づくりをすることができました。目を輝かせて課題を追求する子供たちの姿を見て、教職のやりがいを感じました。

妻と「教員の仕事はおもしろい」とよく話題にしています。二人の息子たちも宮教大卒業後、教職に就き、頑張っているようです。二男もまた小金澤先生に、私以上にお世話になったことから、先生や大学が益々身近に感じるこの頃です。

小学校教員養成課程・プロジェクトヒーク
昭和五十八年度卒業

鈴木 宏子（母）

宮教大には、卒業してから

の方が真剣に楽しみながら学びに行ったような気がしています。指揮法・心理学・カウンセリング・からだの時間。緑が豊かでホッとする空間で、ゆつくりと学びました。そこに息子たちが学ぶことになりました。ますます大学が身近になりました。

今の教員は本当に大変なことが多いです。子どもに学ばせること以外に、仕事として抱えることが多過ぎて苦慮します。でも、その陰で本来の輝きを感じさせる時間も多々あります。私は、学校統合を機に現場を離れたましたが、息子たちやこれからの先生方に期待したいことは、自分を大切にしながら子どもたちの輝きを感じていってほしいということです。応援しています。

（大崎市教育委員会
生涯学習課勤務（非常勤））



初等教員養成課程 情報ものづくりコース
平成二十四年度卒業

鈴木 俊平（長男）

宮城教育大学での学生生活は、私にとって忘れられない思い出です。情報ものづくりコースでお世話になった小野元久先生の下で、製品開発に関する研究に取り組みました。小野先生には、研究の進め方や方法と

いった理論だけでなく、実際に製品開発で使われているソフトの使い方や機械を使った製品の加工方法などの実技も教えていただきました。車やバイクにも興味があった私にとって、製品の成り立ちや仕組みを詳しく教えてくださる小野先生の話や、様々な機械や工具が置かれている研究室での生活は、とても楽しいものでした。小学校の教員として働き始めた自分にとって、これらの経験はとても貴重なものです。

自分の世界を広げてくれた大學生生活に感謝です。
（蔵王町立遠刈田小学校勤務）

初等教員養成課程 社会コース
平成二十六年年度卒業

鈴木 文平（二男）

私は学部生として四年間、大学院生として二年間、宮教大でお世話になりました。学部生の頃は、同級生と合同研究室で会話をしたり、一緒に食事をしたりしながら、おらかな雰囲気でお勉学に励むことができました。いつも笑って話しかけてくれた同級生は私の心のよりどころでした。大学院生の生活では、ひたすらに稲作の担い手の再編について研究をしました。調査を通して、様々な地域、多様な年代の方々とつながりを持つことができ、私の人生の宝物となりました。指導教官の小金澤先生にはたくさん怒られました。指導致官のことに感謝の気持ちを感じ、今後も頑張ります。

（東松島市立矢本西小学校勤務）

今年度定年退職教員

この春、お世話になった四名の先生方が定年を迎えられご退職されます。在学期間中の思い出や、宮城教育大学学生に対する思いを記していただきました。

皆様ありがとうございました



数学教育講座
教授
森岡 正臣

私が宮城教育大学に着任したのは昭和五十九年四月です。高校まで広島で過ごし、早稲田大学から同大学院博士課程まで十三年間東京で暮らし、早稲田大学理工学部助手に内定するとともに本学の講師としての採用が決まり、本学にやって来たわけです。私の人生のうち一番長く暮らしたのが仙台ですから、今や完全に宮城県人です。本学の三十四年間で、多くの学生とともに勉強しましたし、多くの先生方には様々な知見を頂きま

した。今では種々の研究会や講演会、教育実習の現場などに行けば必ずと言っていい程、立派に成長した教え子やお世話になつてゐる先生方と出会い、親しく話をするようになりました。

そういう意味で私の財産は教え子の成長と先生方から得られた様々な知見に尽きると思います。

これによって私自身が成長できたと思つています。ここに改めて皆様にご多幸を祈念させて頂きます。ありがとうございました。



自然の中のキャンパスライフ



技術教育講座
教授
安孫子 啓

鶯やカッコウの鳴き声で春のキャンパスの朝が始まる。このような恵まれた環境の大学はそうはないと思う。平成八年に宮城教育大学青葉山職員宿舎に入居して初めて感じた驚きだった。出身が山形県の天童市なので少なくとも週一は車で往復した。天童から大学まで真つすぐ国道四十八号線つまり関山街道と作並街道を走ることになる。二十三年間で往復二十五万kmくらいになっただろうか。塵も積もれば山となるのである。その往

復中にも猿やキツネやタヌキなど様々な動物たちと出くわした。大学の中庭の雪上を子ダヌキを追いかけて楽しい思い出もある。近年出没しているお騒がせなクマにはさすがに遭遇しないで済んだのは幸이었다。

さて、私が赴任した平成八年は新課程いわゆるゼロ免し課程が船出した年であった。教員養成課程T、Sとの三課程時代が始まったのである。当然旧課程A類B類C類の上級生たちも残っていたわけで大変過密状態で授業を实践した思い出がある。その後、平成十九年度に本学はゼロ免を廃止し、再び初等、中等、特別支援の教員養成課程に特化する。

そして今、次期の教育課程の検討がなされている。本学はいかに良い教員を育成するかについて常に真摯に努力してきたと思う。この自然豊かな素晴らしいキャンパ

スにまた新たな課程を構築して欲しい。

面白かったと言いつつ、面白くない



大学院
教授
田幡 憲一

留年を繰り返した博士課程修了後、六年間を東京都の定時制高校教諭として過ごしました。その中で、「研修会を仕掛けて都内の教員を集め、幸せな時間を共有する。」という楽しみを覚え、そのまま仕事とすることを目論んで宮城教育大学理科教育担当教員として赴任してきました。一九九一年四月のことです。

当初は、それまでの経験から宮城県内の高等学校の先生方と主におつきあいさせていただきましたが、附属小・中学校の公開研究会をお手伝いするうちに、小・中学校の先生方にもおつきあいが広がっていきました。

様々な形で宮城県内のあちこち

で研修会や子どもを対象とした理科実験教室を開催してきましたが、その度に本学の卒業生や附属学校園の関係者にお世話になりました。今年度もまたいくつかの研修会を県内に仕掛けております。公の目的は教育の発展に資することですが、懐かしい友人達と幸せな時間を共有できることは私への余録です。

あつと言う間に二十八年がたつてしまいました。面白かったと言いつつ、面白くないのは、皆様のおかげです。ありがとうございます。これからもよろしく。



退官するにあたって



大学院
教授
宮前 理

C. G. ユングが「夢を見るのではなく見させられる。それが夢の秘密である」と書き残しています。秘密と言われれば知りたくなる平凡な人情冷めやらず、心の謎について長く考えてきました。

宮城教育大学着任は阪神淡路大震災の翌年、平成八年でした。臨床心理学の教育と研究を続け、学生相談室、教育実習、平成十九年度の新教員養成課程改革などに関わりました。

平成二十二年度から三年間附属特別支援学校長を務めました。その初年度、大学の講堂を借りて卒業式を終え学校に戻った直後にあの東日本大震災に見舞われました。あとで大学講堂の天井が崩落したと聞きました。その後、長い安否



確認の末、児童生徒、保護者全員が無事とわかった時の感激を今でも忘れられません。

着任から二十三年が過ぎました。本当に夢のようです。以下、荘子の「胡蝶の夢」の一部です。

「昔者莊周夢に胡蝶と為る。…俄かにして覚むれば、即ち蓬々然として周なり。…知らず、周の夢に胡蝶と為れるか、胡蝶の夢に周と為れるかを。」この「知らず」の知恵によって「夢の秘密」を解き明かしつつあるこの頃です。

大変お世話になりました。宮城教育大学同窓会のさらなるご発展を願っております。

恩師は今

『若く美しくなったソクラテス』の意味に魅せられて



宮城教育大学 名誉教授
安江 正治
(情報学)
(平成 20 年 3 月 退官)

表題の言葉は、プラトンの書簡から引用した林竹二の書のタイトルです。退官後十年近くたって、私には、この言葉が禅者にとつての公案のようによく思いつき、その意味を考えるようになっていきます。

プラトンは、「師のソクラテスだったらどうされるだろうか」と思索していた際に、師のイメージが感動的な姿に変わっていった様子を記した言葉と私は受け取りました。最近では、プラトンだけでなく、人は沈思する

際、その人が出会った人と対話する形で思考を深めているのではと気づくようになりました。その結果、宮教時代の同僚の方々、それに研究室や授業で出会った学生たちが思い出され、その方たちのイメージが表題にあるように若く美しくなってきたことに驚いています。

さらに、小学生の時、同窓生である鈴木大拙(当時八十五歳)のお話を聞き、その時の印象がこの頃になって回想され、彼の書を読み直しています。その中に、人の認識には、論理的な面と非論理的な面があり、どちらも人にとって大切と指摘されていることに注目しています。プラトンが「内なる魂の美的調和に満ちたアイデア」を思い出しなさいと言ったことは、この非論理的な認識につながっているのではと気づくこの頃です。

安江先生は、現在、仙台医療センター附属仙台看護助産学校の非常勤講師として情報科学の授業を担当されています。

同窓生の輪

増田地区の志教育



名取市立増田小学校 校長
吉木 修
(中学校教員養成課程 保健体育専攻 昭和 55 年度卒)

名取市は平成三十年で市政六十周年を迎えました。市内には小学校十校、中学校四校、そして今年度四月に開校した県内初の義務教育学校である閑上小中学校を含め計十五校あります。さらには、名取北高校、県農業高校、県立名取支援学校や国立仙台高専名取キャンパス、尚絅学院大学などがあり、それぞれが連携して子供たちの教育に取り組んでいます。

近年、名取市は児童生徒数増加傾向にあり、これまで増田小だけが教頭複数配置でしたが、愛島小・増田西小・下増田小も複数配置の大規模校となっています。

ます。

増田中学校区では、平成二十九年、県教委の志教育支援事業(推進地区指定)を受け、増田小・下増田小・増田中・名取北高校の四校が連携して「わたしたちの力で まちに笑顔を」をテーマに、志教育に取り組みました。

名取駅や杜せきのした駅、美田園駅での「朝のあいさつ運動」や「名取・増田児童生徒サミット」を展開しました。サミットでは、名取市長や市議会議員と代表児童生徒が「笑顔でつながるまち なとり」をめざして、私たちにできることを話し合いました。

これらの取組は、指定が終わった現在も続いています。あいさつ運動では、PTA会員や地区の健全育成メンバー、駅職員の皆様の協力も得ながら進めることができています。





弓道部 (OB)

窪田 憲二

盲学校教員養成課程
平成十年度卒

二部リーグ昇格!

弓道部について初めて知ったのは、課程の歓迎会で先輩から前年度東北大会で準優勝した話を聞いた時だった。準優勝、練習は週三回、初心者大歓迎、しかも筋トシ等はない。「なんかいいな」そんな軽い気持ちで大学の外れにある弓道場に見学に行き入部した。師範の先生もいらしたが、基本的には上級生が下級生を指導するという練習スタイルで、厳しい面もあったが、和気あいあいという雰囲気だった。

弓道部の大会は、小さな大会を含めると十回前後あった。大会の中でも一番の思い出は、主将だったときのリーグ戦で二部昇格を果たしたことだ。リーグ戦は各大学八名、現役員だけでは足りず、引退していた四年生に協力を仰ぎ出場した。四年生の活躍もあり、初の二部リーグに昇格することができた。

練習や大会以外では、弓道場で食べた各県の味が楽しめた芋煮、磯浜合宿所でのキャンプファイヤー、リーグ戦の前に先輩たちが振舞ってくれた栄養たっぷりの鍋に入っていたピータン…とても楽しかったな。

(愛媛県立しげのぶ特別支援学校勤務)



サークル今昔



弓道部 (現役)

庄子 真彩

初等教育教員養成課程
英語コミュニケーションコース
平成二十八年入学

心を一つに

部全体として強くなりたい、という思いを抱え始まった私たちの一年間を振り返ります。それまでは機会が少なかった練習試合を積極的に組み、刺激を受け、練習では部員同士指導し合う中で少しずつ成長してきました。段々とチーム力が高まり、夏の全教では女子団体・個人共に優勝することができました。自分たちの成長を実感し、団結がさらに強くなったことで秋季リーグ戦に向かって全員心が一つになりました。その思いや努力が実り、秋季リーグ戦では男女共に優勝し、男子はⅢ部、女子はⅡ部リーグ昇格を成し遂げました。さらに、我が部のエースが東北地区代表として女子東西学生弓道選抜対抗試合への出場を果たし、また女子は全国大学弓道選抜大会への切符を手にするのができました。このような結果を出せたことに自信を持ちつつ、現状に満足せず、射を磨き続けながらさらにチーム力を高めていきたいです。

最後に、いつも支えて下さっている師範・顧問の先生方、コーチ、OB OGの皆様には心より感謝しております。今後とも部員一丸となって全力で宮教弓道部を盛り上げていきます!



事務局だより

平成三十年度の同窓会総会は、矢部鋼治氏（昭和六十二年卒、二十回生）を実行委員長として、八月四日（土）、宮城教育大学講堂にて盛大に執り行われました。また、総会の後には、大学のホームカミングデーとの共催行事や合同懇親会も開催され、多数の方々にご出席いただきました。ご多忙な中、総会開催にご尽力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。次年度は、昭和六十三年卒の皆様を中心に実行委員会が結成され、準備が進められていくところです。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

さて、同窓会会報「山にありて」はこのたび三十号を迎えました。同窓会のこれまでの歴史を振り返る記念号ということで、編集委員の皆様のご尽力により充実した内容となりました。ご執筆・ご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。なお、同窓会の理事会等においては、三十号の発行をひとつの節目として、WEB会

報化なども含め、今後の同窓会会報のあり方についてもご検討いただいているところです。編集委員の皆様は永年にわたるご尽力に心より感謝申し上げますとともに、「山にありて」のますますの充実を祈念いたします。

最後に、同窓会会報の発行を含め、同窓会活動は皆様からの会費によって成り立っております。未納の皆様におかれましては、このことをご理解いただき、ご協力くださいますようお願い申し上げます。末筆ながら、同窓生の皆様の日頃のご支援に感謝申し上げますとともに、引き続き同窓会活動にご支援を賜りますようお願い申し上げます。

事務局長 越中 康治
(平成十二年卒)

をひとつの節目として、WEB会

同窓会費納入先
郵便振替
022402-34558
宮城教育大学同窓会
同窓会費：八、〇〇〇円（終身会費）

編集後記

おかげさまで記念すべき第30号が完成しました。

今回は記念号として、これまでの歴史を振り返るとともに、少しでも多くの同窓生の声を届けられるような内容にしたいと思い、8月から編集会議を重ねてきました。

記念号にふさわしく、ページ数も8ページ増量し、いつもよりたくさんの方に御寄稿いただきました。御協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

本号を通して、御寄稿いただいた皆様だけでなく、読者の皆様にも新たなつながりが生まれれば、編集委員一同、心よりうれしく思います。

次号第31号は、内容を新たにリニューアルしてお届けする方向で、ただ今検討中です。次号もどうぞ

ろしくお願いいたします。
(編集長 野中 映里
仙台市教育センター勤務)

【編集委員】

- 橋本 俊一 (昭和 48 年度卒)
- 末永 精悦 (昭和 53 年度卒)
- 鈴木 朝二 (昭和 53 年度卒)
- 平間 正信 (昭和 62 年度卒)
- 浅野 郁子 (昭和 62 年度卒)
- 加藤 良樹 (平成 6 年度卒)
- 堀之内 優樹 (平成 9 年度卒)
- 野中 映里 (平成 10 年度卒)
- 近藤 ゆき (平成 13 年度卒)



白熱した編集会議

恩師訃報

伊藤 博義先生 (本学元学長、法学) 平成三十年 十月 三日
 降矢美彌子先生 (本学名誉教授、音楽科教育学) 平成三十年十二月 十六日
 宮腰 孝先生 (本学名誉教授、精神保健学) 平成三十年十二月二十三日
 渡邊 孝男先生 (本学名誉教授、衛生学) 平成三十年十二月二十五日

が、ご逝去なされました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

同窓会誌が Web ページで見られます

第28号から同窓会誌をWebページで見られるようになりました。宮城教育大学Webページのメニューから「卒業生の方」をクリックし、「同窓会」リンクボタンをクリックすると同窓会誌PDF版を閲覧できます。パスワードは、「yamaniarite16」(やまにありて16)です。